



美への黄金道＝フィボナッチ数列

の超弩級の意味を析出する！

—太陽花（ひまわり）精神によるバルトークのフィボナッチ数列利用への批判とベートーヴェンの内臓抽出を経て

私は10年近く前からの数年間、東京田無の東大農場における市民活動に加わり、ひまわりの生長を観察する機会を持った。

ひまわりと言えばその先端の花の中のフィボナッチ数列（隣り合う数比が黄金比 1.618 目指して力強く驀進してゆく）そのままの美しい螺旋構造が連想される。

なお、ロクリアン（ロクリア音階）とは、七種類ある全音階のなかで、全音階の持つ螺旋構造を最もつかみやすい形で切り取った部分といえる（シからシまでの S 字状にご注目！）。だからそんなものを自分の名前に冠している私にとって、ひまわりは私自身の植物的化身と言う感じがしてならないのであるが、。。。。。

ところが、その東大農場でのその数列に関する説明が悪かった。それは、以下のようなものだった。

1・1・2・3・5・8・13・21・34・55・89・144・233・。。。。。

で、①こうやって隣り合う数の比率はどんどん黄金分割比率 1.618 (0.618) に近づいてゆく、と言う話や、②このフィボナッチ数列は、なにもわざわざ覚えなくても最後の二項を足した数を書いて行けばよいだけの事、という話は皆さんよく御存じかと思います。

ネット上で検索しても大体こういう説明がなされているようだ。

①の「最初は比率が、1、2、(0.5)、だがそれが徐々に徐々に、黄金比へ近づいてゆく、しかも無限に」と解釈すれば、これは実にすばらしく、この後私が自力で析出（情報入力にたよらず！）した後述の事実とも矛盾しない。車の両輪ともいえる。

しかし、②がよくない。このように部分抽出した上での足し算や割り算をしたところで、ひまわりの持つ黄金比衝動など、これっぽっちも体験出来やしない。

それもそうだ。はじめっから相手を突き離し固定化して計測の対象にしているのだから、折角の太陽花もフィボナッチ数列と一緒に干からびてしまおうというものだ。

そういえば、20世紀の大作曲家、ベラ・バルトークが自然観察が好きで、フィボナッチ数列や黄金比の数値を音楽の数値構造に置き換えたことはよく知られている。

いわゆる「弦チェレ」「弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽」はその代表的なものだ。

私はインターネット上（の動画）にも出してある弦楽オーケストラ曲「異次元航路」を作曲した後、「弦チェレ」の聞こえ方は大分変わってしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・これ以降、生きた講演口調で書き記すと・・・・・・・・・・・・・・・・

数値をもってきて、時間の長さ拍の数や音程に適用する、、、、なんて、なんだかこじつけ的で自己満足もいいところです。

よくできた音響デザイン、あるいはデザイナーチャイルドならぬデザイナー音楽、まことにグロテスクなものです。クラシック音楽の原型（バッハのフーガとか、ベートーヴェンの発展性とか）とか精神が残っているために大きな矛盾が生じ、却ってまがい物っぽさが目立つのです。

素材を用意しそれに手を加えるのが作曲だ、とする態度と、芸術というジャンルが用意されているから、それを利用して自己実現を図ろう、という態度は本質的に同根でしょう。音楽素材であれ、芸術ジャンルを相手とする自分自身であれ、それを一度対象化した上で操作しようというのですから、上の二つの態度は実に相性よく、結託しやすいのです。

でも、そんな魂胆から本当の芸術作品や純正で生き生きした音楽が出て来るものかどうか怪しいものです。

そんなことよりも、人の体に見えるごとく、我々は知らぬうちにフィボナッチしてしまっているのですからそれに身を任せつつ美の極点を目指して創造活動に励むことなのです。すなわち、おおいに天然ボケしつつ天然に目覚めよ、と。無理でしょうか、私はいびきをかきながらそのいびきをメロディに変形することが出来ます。いびきで歌えるのです。

植物は「今を生きて ある」「今に生かされて ある」だけでしょう。

自分が今フィボナッチ数列の何項目にあるとかその数がいくつだとか意識なんかしません。ただ、いま というのと ある というのが張り付いているだけです。それも、眠れるままに です。

ただ、不可知の何様*の一分子としてある。(LM 造語 不可知の何様 について 詳しくは当 HP のその項目をご覧ください。)

「ええい、めんどくさい、何項目であれ、同じ X でしかない。」と。

ベートーヴェンもそんな人だったのではないか（ベートーヴェンといえば、偉人とされ、その「強靱な意志」でその表象面が覆われがちだが、昨日まで書き進んだ曲を発展させるべくその先を書き加え、明日を開こうとする。やはり日々、X であった、X していたのではないのでしょうか。

私という盲点に徹した人、ともいえるし、唯一性すなわち個性に徹した人ともいえる。

バルトークも基本的にはそういう人であったが、なにしろ知的操作が先に立つようなタイプの人だからこじつけ的な手段を使うこともあり作品にでっち上げの観があるものも少なくない。

デザイナー音楽ひしめく現代音楽の草分け的存在、と一方では言わなければなりません(なお、シェーンベルクにはそういう要素は全くありません。主客合一性が大切にされています)。

先ほどのフィボナッチ数列の話に戻り、Xの値は何か、もうお分かりの方もおられましょ

うか。

昨日までの結果は出ています。明日以降の計画も立てられます。

しかし、本日どうなるか、これがわからない。しゃにむに努力、というより足掻き苦しむほかありません。だって、自分自身からして灯台下暗しで見えないのだし、周りの者だって、本日のそれは近すぎてよく見えません。まさにプロセスの渦中にあるのだし兎にも角にも生きることで忙しい。音楽だって今演奏しつつある小節など、目をつむって必死に音楽するしかない、というのが正しいところです。でも、「何があるか?」とって、本日の自分ほど確かな有、すなわち存在はないではありませんか。違いましょうか。

答えは $X=1$ です。

だって、はじめから昨日までの総数に1を足せば=明日の値に等しくなるのですから、素晴らしいじゃありませんか! どの項に置いたってそうなのですから。

そう、みんなみんな一者です。

ふぁみれどしっし しどれみふあつふあ ふあつふあっしー しっしっふあー
貴方も一者、私も一者、オンリーワン、オンリーワン

さあ、みんな歌ってください!

それぞれかけがえのない、というのは?

そうです、

それはそれぞれ不可知の何様の、それぞれ違った掛け替えのない一つ一つの分子であるからです。クローン人間だって例外ではありません。

人間、いつまでたっても不可知の何様に直接手を加えることは出来ませんから。

不可知の何様こそ、この世のすべてのもののアイデンティティを保証するものです。

それともう一つ、美空ひばりの言葉じゃないが、日々前進、日々向上なんです。

日々、一歩一歩上に上がってゆく。プラスワンなのです。

ふぁみれどしっしー しどれみふあっふぁー ふあっふあっしーー しっしっふぁーー
貴方の一步、私の一步、プーラスリーワン、プーラスワン

全ての項は、生きる者にとって、(人間の場合、明日は数として計画立てたり予測出来たりすることもあるが)今日は 1 なのです。
そしてそれが昨日となると、1ではなく、各項の数が分かります。

ある(在る)、ということではオンリーワン
なる(成る)、ということではプラスワン

これでこそフィボナッチ数列は人間にとって「生きる」ということと一体になれるのです。

「異次元航路」を作曲していた時に、私はフィボナッチよろしく螺旋に生きた。
グレコの「無原罪のお宿り」(処女懐胎)も上向(また、それを生かす下降の)螺旋に満ちている。

太陽花の沸騰する身体、同じく沸騰する人間の精神

それに反し、おとなしい生徒さんによる黄金分割比率に基づく絵画制作は却って自分たちの有する生命力を押し殺す結果を招きはしないか？

なお、不可知の何様とは

あの世もこの世の区別もない、一切合財のものが帰属しているもの。
個性であることと普遍であることが成立する唯一のものと言えましょう。
だから、有そのもの 存在そのものなのです。

(なお、X=1は私 LM が自分自身で発見したのですが、そんなことは大したことではないでしょう。そこにどれだけの意味、意義、価値を覚えるか、の方がはるかに重要なことではないでしょうか？)

2014.7.15 ロクリアン正岡

補論

フィボナッチ数列は、1・1・・・とはじまっているが
このいま、今日の一歩、この1小節というようにして一歩一歩前に進んで行く、上へ積み上げてゆく、ということでは

$$1+1+1+1+1+1+1=7$$

というように、項の序数、あるいは項の合計数とみることも可能で単純この上ない。
そして、フィボナッチ数列の「この今！」の末端にただただ項であることを示すだけの「1」
秘められた仕方で重ねられている、ということはさすがに造化の御業＝不可知の何様にお
ける仕掛け、と言えよう。

それにしても、いまはやりの「自分探し」など、何と薄弱な響きがすることだろう。

チューリップは桜したり菫したり木蓮したりするだろうか。

それはただただチューリップするのみ。させられるのみ。

いかなる植物もそうだ。だからこそそれぞれに美しい。

それと同様に

モーツァルトはモーツァルトするほかなかった。

ベートーヴェンはベートーヴェンした。というよりもベートーヴェン二乗をやったのけた。

まことに、太陽花に負けぬ意志をもつ彼ら彼女らではないでしょうか？

我々人間は、植物と違って、「なおかつ それに目覚める」ことができる。

意識の不思議さ、「意識って何者？どこから来てるの？」

(問いの発展、問いの総合の今後をお楽しみあれ！

皆様もいかが？ただし重箱の隅つつきや、先細り型は時間の無駄でしょう。)

なにはともあれ

天然道万歳！ 意識万歳！ 不可知の何様ありがとう！

2014.7.17 ロクリアン正岡